故郷の月光（つきあかり）と海草を愛する人

福本明美第二詩集『月光』に寄せて

鈴木比佐雄

1

福本明美さんと初めて出会ったのは、二〇〇八年に四万十市で開かれた詩誌「ＯＮＬ」百号記念を祝う会であった。私は二〇〇〇年に亡き浜田知章さんに同行して五十号記念に参加したこともあり、「ＯＮＬ」主宰の山本衛さんには必ず百号記念の会には参加するという約束を果たすことができたのだった。山本衛さんから紹介されて当日は立ち話であったが、若い頃から詩作をしていて、そのころの詩篇をまとめた詩集があると語っていた。私がその詩集を読みたいと言ったので、しばらくすると第一詩集『ぷるん』が送られてきた。この詩集は二〇〇〇年に刊行されているが、実際に収録されている詩篇は二十年以上前の一九七〇年代の作品であることの経緯を跋文「反恋歌の切実さ」の中で片岡文雄さんが記していた。片岡さんは県立高知北高校で週に一度特別講座「土佐の名作」の講師をしていた。一般社会人の受講生の中に福本明美さんがいて、福本さんは若い頃の詩篇を片岡さんに読んでもらい、詩集発刊のアドバイスをされたという。その意味で片岡さんの的確なアドバイスがなければ、福本さんはその後に新たな思いで詩作を「ＯＮＬ」で継続し、今回の詩集『月光』をまとめることは出来なかったかも知れない。福本さんは片岡さんに見出され、山本衛さんの「ＯＮＬ」という詩の土壌で開花した詩人と言えるだろう。

第一詩集『ぷるん』は、個人誌「ぷるん」などに書かれた二十代半ばから三十代半ばまでに書かれた詩篇で、一人の女性の恋情が赤裸々に書き記

されている。恋愛に命を賭けるような切実さが文体に宿っているが、互いに傷付けあう男女であるにもかかわらず、次のような詩を読むと福本さんが男女を越えた普遍的な視線を当初から持っていたことが分かる。

くろうばあ

春の夕ぐれに
釣り人たちが帰った後
くろうばあがはえている
はらっぱで
目をつぶらないで
つぶっている間に
見えなくなったとおもわないで
駆けあがっていく
堤防に向いて立って下さい
橋の向こうで
見えなくなるまで
駆けていく私を
見送って下さい

そして
もう人の気配が
かんじられなくなってから
安心して
あの人を
おもっていいのです。

（「ぷるん」3号・76年8月）

別れた男だけでなく、別れた男が愛する女を思いやる気持ちが秘められていて、福本さんのその

後の人間愛の詩篇を予感させる。福本さんの第一詩集は、男女の行き違いの切なさのような恋愛詩が試みられていたが、何度か読んでいると男女というよりも人間関係一般にも関わる広がりが感じられる。きっと福本さんは人と人との掛け替えのない真剣な関係を求めているからだろう。たぶんその出逢いの瞬間の織りなす関係性の情感を掬い上げて書き記すことが、福本さんの詩の持ち味なのだろう。その意味では人間関係の全体を見通すようなどこか小説的な視野を抱え込んだ詩作を試みていたのかも知れない

次に「供養」という詩を紹介したい。

供　養

波にのって
白い紙が散々と流れる
岩にこしかけて
祖父が行方をみています
私達はもうはしゃいで
波打際の四角い紙を拾って
沖へ流します
遠くひろがる深い海の
もっとも深いところから
こちらの風景を
叔父はしのんでいるかも知れない
祖父の声が海に沈んでいきます

（「ぷるん」4号・79年7月）

祖父が見つめて家族が海に灯籠を流している。子供だった福本さんと姉弟は、はしゃぎながら戻ってくる灯籠を再び沖に流そうとしている。すると亡くなった叔父の視線を「深い海」から福本さんは感じてしまう。自分たち家族が叔父を偲ぶだけでなく、叔父が逆にこちらを偲んでいるのかも知れないと想像している。人間と死者との関係を決して消えることのない関係が存在すると考えているのだろう。自然に生かされて人間の営みを灯籠流しを通して伝えてくれている。最後の祖父の言葉「祖父の声が海に沈んでいきます」とは、叔父の死を悲しむ祖父の想いを伝えるだけでなく、祖父の死をも暗示させている。そのような自然・宇宙の中で営まれる人間の生と死の宿命のドラマを書き記そうとしたのだと思われる。私にはこの「供養」という鎮魂を重層的に考えようとした試みが、今回の詩集『月光』につながってくるのだろうと感じられた。

2

新詩集『月光』は三章に分かれ三十九篇が収録されている。一章「月光」の冒頭の「月光」は、私たちがかつて感じていた月光の神秘的な力を甦らせてくれている。その光の中で死んでしまった親しい人びととの対話が始まるのだ。

月　光

満月の夜
光が開けた口から身体に入る
地球の熱気が
敷いたビニールシートから
背中に伝わり
組んだ指先から胸深く広がる
各自に駐車している車から

エンジンの音がする
クーラーをつけて外に出てこない
愛のひめごとは
唇から乳房に触れてほてっている
海を見渡す小高い丘の広場に
なまぐさい　風がわたる
円座して口々にしゃべっていた
私たち四人は
蚊取線香をシートの角に置いて
雑草の中に足を伸ばし　静かに憩う

樹々の向こうに見える
海面の光は静止して
ゆっくり月の力を確かめている
生きている切なさを
無限の時間の中に潜める

暗雲が切れて　消えていく
真夜中　月は真上にあがった
静かに頭上に時をおとす
十万億土の遠くから
父の魂が帰ってくる

満月の明かりがささやかに
生きる誇りを芽生えさせてくれる

五連から成り立っているこの「月光」は、初めの一連の「満月の夜／光が開けた口から身体に入る」の二行によって、身体に月光が沁み込んでいくさまを絶妙に表現している。月光を異次元のよそよそしいものではなく、身体の一部にしてしまうのだ。さらに「地球の熱気」さえ「組んだ指先から胸深く広がる」ように感じてしまう。このように大らかに月光を感受していく福本さんは、巫女のように月や宇宙からの霊と交感したかのようだ。

二連では月見の駐車場の車中の男女の秘め事と雑草にビニールシートを敷いて月見をしている自分たちとを対比させて、聖と俗が渾然一体となっている情景を描いている。三連目には樹木の向うの海面から昇ってくる「月の力」から「生きている切なさ」を感じて、それを「無限の時間の中に潜める」という。そして四連目では、真夜中になり月が頭上に差しかかると、「十万億土の遠くから／父の魂が帰ってくる」のだ。五連目ではその月光であり「十万億土の父の魂」との交流こそが「生きる誇り」を甦らせてくれることを告げている。この福本さんの月光への畏敬の念は、多くの人びとが共有していたものだろう。しかしながら二十四時間働く街の灯によって、月光のささやかな輝きは喪われつつある。けれどもこの「月の力」を借りなければ愛する死者たちの魂も、地上に訪れることはないのだと福本さんは物語っているように私には感じられた。

一章の他の詩篇も、病気の母、娘、夫などの家族の現実を見つめながらも、父の魂や月光や宇宙の力によって暮らしの淀みが浄化されて一人の人間としての「生きる誇り」を取り戻す詩篇が集められている。

3

二章「明けがた」（十篇）には病の母に寄り添いながらも、母の生きるエネルギーの衰えを直視し、誰にでも訪れる人間の老いの現実を書き記している。そしてだからこそ命の儚さを知り、自分が目撃する命の尊さを詩行全体で語ろうとしている。母と弟の二人が生きる意志を失いかけている現実を自然に受け止めてそれを引き受けるしかないと、福本さんは人間の定めのようなものに傾き

かけている。しかしそのような定めに反逆するように大らかに根源的に異議申し立てをするエネルギーを詩篇全体から発散させている。二章の中から「夜道」を引用したい。

夜　道

障子を開けたが気がつかない
誰かねといいながら
ゆっくり紐を引っ張って
灯りをつけた
忘れ物をしたからと言ったが
戻ってきたのは
母に謝るつもりだった
頭をあげたが言えなかった
口喧嘩して
その勢いで帰る途中に引き返した
坂の途中で
聞こえてくるラジオがついていない
薄暗い道をつんのめりながら坂を慌てる

夕食は手をつけていなかった
肉がついた丸い肩
背を丸めてベッドに座り
寂しさを打ち消すように
独り言を呟きながら
繰り返し　繰り返し聞いていた

片照る山の陽が沈むのを背に
自転車をとばした
ゴクゴクと喉に沁みこんでいく水で
徐々にほどけていく
母の夕食を片づけて帰る
月の光をじっとためこんで

ゆっくり雲が動く
自分のやけが寂しかった

「夜道」を読むと福本さんが、一人の愚かな人間として自己を曝け出しながら、自己を凝視するその自己批評性の強さに私は感銘を受けた。いくら母の立場に寄り添おうとしても、自分にもプライドがありそれを傷付けられると腹を立てて喧嘩別れしてしまうのが人間だろう。それでも母の住まいに戻り、いつも聞こえてくるラジオの音が聞こえてこないので、母が死んでしまったと思い気が動転して部屋に入ると、母は独り言を呟いていたという。この詩でも月光が出てくるが、「月の光をじっとためこんで／ゆっくり雲が動く」だけだった。しかしそのわずかな月光によって「自分のやけが寂しかった」と福本さんは記していく。月光のような大きな愛がなければ、人間はやけになり、簡単に関係を破壊してしまうと語っているかのようだ。

三章「早春」（十九篇）は故郷の人びととの交流を記した詩篇だ。その詩篇には、現在には薄れている人間的な情感の交流が描かれている。多くは亡くなった人びとのことを回想する詩篇だが、福本さんの詩はその交流の情感を甦らせることによって成り立っているように思える。福本さんの家族に関わる詩が普遍性を感ずるように、故郷の友人・知人との長い間の交流もまた、深い人間愛と同時に死に向かう人間の定めを直視しているからだと思われる。三章の最後に置かれている詩「春潮（はるのしお）」を引用したい。

春潮（はるのしお）

陸に近い岩は砂に埋もれ

岩にくっついている海草がもがいていた

大潮にも地元の人は見かけない
磯を歩きながらシイやニナを探したが無かった
ひと昔　ふた昔も
夕食のまかないの一品二品になり
つまみになっていた

春の潮は
上(かみ)から下(しも)まで人出がありのりしろだった
姑息な大人もいたが
楽日だった

命を奪うこともあったが
子どもの頃の風景を
人は早めていった

それは地元の人ではないが
地区民は海を忘れている

海の音の変化に敏感でなくなり
消滅しても痛みを覚えない
重なる海の変化は
人間関係同様崩れが大きい

海もあえいでいる　と
空から年寄りが言いようけんど
村外の人が多くなり
年寄りは施設に入っている

肥料にもならない海草の太る芽があれば
岩場も村の暮らしも種があるだろう　と
今晩の味噌汁に酢の物にと
フノリをむしった

海草は
空からの予見だろうか

かつて高知の海辺の人びとは海と共に生きていた。春の潮には海の恵みの海草が満ちていたという。そんな海への敏感な感受性が共有されていた。海の音の変化も聴き取ることが出来なくなった。けれども福本さんは「今晩の味噌汁に酢の物にと／フノリをむしった」ことを忘れないで今も続けている。最終行の「海草は／空からの予見だろうか」という二行は、きっと福本さんにとって月光と海草は同じような聖なる存在であり、故郷を成り立たせる欠かせない構成要素であるに違いないのだ。福本さんの詩は、人間が生きるに値する故郷を通して人間の真実を大胆にしかも繊細で濃厚に物語っている。そんな故郷の月光や海草などを愛する人びとや、異郷でそれらを想起している人びとにぜひこの詩集を読んで欲しいと願っている。

福本明美詩集『月光』栞解説文

鈴木比佐雄

コールサック社

2011